

【DRG『OVER SOUNDS』: グランジの亡靈と未来のノイズが交錯する、新世代オルタナの胎動】

DRGによる1stアルバム『OVER SOUNDS』は、かつてNirvanaやRadiohead、Smashing Pumpkins、Nine Inch Nails(NIN)といった巨星たちが築き上げた“オルタナティブ”という感覚を、2020年代の閉塞感とともに再定義しようとする試みである。ラフミックス音源ながらも、すでにその骨格からは強烈な輪郭が伝わってくる。ここには“似て非なる”焼き直しの模倣ではなく、確実にアップデートされた「継承と破壊の意志」が宿っている。

反復と歪みによる“粘性のあるリアル”

『OVER SOUNDS』全体に通底するのは、反復される言葉と歪んだトーンがもたらす“粘性のあるリアル”だ。たとえば《My soul is calling》に見られるような淡々としたフレーズの繰り返しは、90年代オルタナの“倦怠と絶望の語り口”にどこか近いものがある。

“When the worst times come around,
And the world feels upside down”

というラインが象徴するように、本作は「大声で叫ばない怒り」「爆発せずに内圧を保ったまま膨張する焦燥」といった、極めて現代的なエモーションのスタイルを取る。

これはもはや“反抗”という形では表現されない。むしろ、日常の中に溶け込んだ絶望や、微細な自己否定の積み重ねといった、見えにくい痛みへのアプローチがなされている。

Nirvanaの魂、Radioheadの解像度、NINの抑圧感

DRGの楽曲群には明らかにオルタナ四天王への敬意が感じられる。

Nirvanaのようなコード進行と一音一音の荒々しさ、**Radiohead**のような音空間の緻密な配置と精神の揺らぎ、**Smashing Pumpkins**的な轟音とメロディの両立、**NIN**に通じる閉塞的で機械的なリズム感。

それらがまるでスキャンされたように抽出されていながらも、DRGの音楽は決して“レトロスペクティブなパスティッシュ”ではない。

むしろ、Z世代以降が抱える「メンタルの無音地帯」——感情の輪郭を失っていく感覚、爆発すべき怒りが“理由の所在”を失っている感覚——に極めて忠実なアレンジがなされている。そこが、単なる“グランジの模倣”とは一線を画す点だ。

“声を荒げない反抗”というスタンス

グランジやインダストリアルが生まれた当時、それは明確な反抗の音楽だった。社会への不信、家庭への憤怒、自分自身への嫌悪。あらゆる否定が爆音で叩きつけられていた。

だが、DRGは違う。彼らは「もう怒る元気すらない、でも何かがおかしいとは思っている」というスタンスから音を発している。これは、全肯定でも全否定でもない。“不定形の違和感”をそのまま音に変換しているような姿勢だ。サウンドにこびりついた疲労感、回復を諦めたようなテンポ、何も解決しないまま終わっていく構成。これらはすべて、「感情の形容が困難になった時代の、ある種のリアリズム」として響く。

DRGは何を更新したか

『OVER SOUNDS』は、単なるオルタナのリバイバルではない。DRGが鳴らしているのは、2020年代の“孤立と希望なき時代”における、生存のための音楽である。

NirvanaやNINが90年代の倦怠と対峙したように、DRGは2020年代の“情報過多による無感覚”と闘っている。このアルバムは、その静かな戦いの記録であり、同時に、次世代オルタナティブ・ミュージックの“胎動”なのだ。正式リリースを心待ちにしながら、このラフミックス段階で感じられた切実な声に、今はただ耳を澄ませていたい。